伊澤修二と高遠

1870（明治３）年、大学南校（現在の東京大学）に入学してからは、伊澤修二の活躍は中央が舞台であった。伊澤が心に秘めていた故郷の将来のためにという思いを実行に移すのは、1910（明治43）年、60才を越えてからであった。

資料20

資料21

高遠進徳図書館及び美術館

伊澤は、東高遠に小学校を移転して、そこに体育場、博物場、図書館を建設し、父親の名前をつけて「文谷園（ぶんこく）」とすること、また、進徳館の恩師中村元起（げんき）（黒水（こくすい））の功績をたたえ、図書館は「黒水図書館」と名付けることを提案した。

これにはさまざまな反対意見があり、「高遠進徳図書館及び美術館」（資料20、21）として西高遠に建築することになった。

建築工事を経て、開館式は1916（大正５）年９月23日。当時高遠町長であった上島善重（よししげ）に初めて相談の手紙を送った1910（明治43）年から６年が経過していた。

跡地に今も立つ「文谷園」の碑
1918（大正７）年、伊澤多喜男（修二の弟）によって筆及び建碑

これを仰げばいよいよ高くこれを望めばいよいよ遠し

伊澤には、「高遠社」という古来から高遠出身で活躍した名士たちをまつる神社を建設する夢があった。（資料22）神社には二本の石柱を立て、一方には「仰之愈高（これをあおげばいよいよたかく）」、他方には「望之愈遠（これをのぞめばいよいよとおし）」と刻みたいと考え、1917（大正６）年春、自ら毛筆で書いたこの詩を上島善重に送った。（資料23）同年５月３日、伊澤はこの世を去り、高遠社は幻に終わる。

しかし、伊澤修二の故郷に寄せる思いが込められたその詩には、唐沢史比古（ふみひこ）氏によってメロディが付けられ、「仰望（ぎょうぼう）」という曲となって歌い継がれている。

資料22　1916（大正５）年８月９日の上島善重宛伊澤修二書簡に描かれた高遠社のイメージ図。
上部○には「老生寄附地所」と書かれていて、伊澤が土地を寄附しようとしていたことがわかる。

資料23

*資料は伊那市立高遠町歴史博物館に所蔵されている。　上伊那教育会郷土研究部伊澤修二委員会作製　2016年10月29日